【人物】南極点単独徒歩到達から更なる夢の続きへ（1）冒険家というキャリアを選択して生きる

2019 年 1 月 17 日、日本人が南極点単独徒歩到達に成功したというニュースが流れた。それを成し遂げたのは秋田県出身で東京都板橋区在住の冒険家・阿部雅龍さんである。南極には板橋区の町工場の職人たちが作った真っ赤なソリが帯同されていた。

南極点単独徒歩到達に成功した冒険家の阿部雅龍さん（38 歳）

『次の夢への一歩』(阿部雅龍 角川書店 2013)という阿部さんの著書の巻頭カラーページの一文には、こう記されていた。

「自分が
″特別な″人間ではないことに
絶望する瞬間がある。
残念ながら僕は選ばれた
一部の才能人ではない。

人生で何度もそう痛感し、
特別でない自分が嫌になった。
それでも僕は諦めない。
やり方次第で示せることがある。
諦めずに戦いたい。」

300 人が参集した「報告会」

2019 年 2 月 26 日、板橋区立グリーンホールで「阿部雅龍 南極点単独徒歩到達報告会」が開催された。発起人には地元・板橋区の中小企業が数多く名を連ね、約 300 人が参集し立ち見が出るほど盛況だった。

板橋区立グリーンホールに約 300 人が参集した報告会

ちなみに板橋区は冒険家と所縁が深い。板橋区には、1970 年日本人として初めて世界最高峰エベレストの頂上に立った植村直己の功績を讃える「植村冒険館」がある。植村氏は兵庫県出身だが、1969 年より板橋区で暮らし始めた。そして阿部さんが南極点を単独・徒歩で目指すにあたって、多くの支援者が関わるようになったのも、奇しくもこの冒険館が関与している。

報告会開演前、赤いジャケットに身を包んだ長身の男性が颯爽と会場に現れた。それが阿部さんだった。人なつっこい笑顔に参加者一人一人に深々と頭を下げて挨拶をする礼儀正しい立ち居振る舞い。そして左頬には、過酷な南極生活を彷彿とさせる凍傷があった。

報告会でプレゼンテーションをする阿部さん

阿部さんはノーマルルートより難しいとされる「メスナールート」（1989 年、イタリア人冒険家ラインホルト・メスナーがドイツ人の冒険家アルブド・ブックスと共に通ったルート）を、南米・チリなどを飛行機で経由し、南極大陸のロンネアイス棚氷から徒歩で南極点にたどり着いた。55 日間をかけて、距離にして 918km、重さ約 110kg のソリを引きながら日本人として初めて踏破したのである。

報告会で語られた内容によると、南極はホワイトアウト（雪によって視界が白一色となり、方向・ 高度・地形の起伏が識別不能となる現象）で、生物がまったく生息しない世界。氷河の深い割れ目であるクレパスや強烈な向かい風が立ちはだかる過酷な環境だ。遠征の前半は例年にない豪雪で、後半は寒波に見舞われた。

そして前半の悪天候によって、全力でそりを引いても動かず、前のめりに何度も顔から転んだという。行程が遅れて食料の消費が激しく、当初目指していた「無補給」での踏破の方針を転換せざるを得なかった。そしてスタートから 31 日目で食料補給を受けた。無補給については「冒険としては美しい形」と阿部さんは表現していた。しかし「今、ここで意地を張って命を落として、次の冒険を諦めるわけにはいかない」と、夢を繋げるための苦渋の選択だったと語った。

その時に阿部さんの口から語られた次の夢。1910～1912 年に日本人初の南極探検を行った、秋田県にかほ市出身の白瀬矗（のぶ）が果たせなかったルートをたどり南極点に向かう「白瀬ルート」の踏破だ。

人力車を引きながらトレーニングをし、冒険家として生きる

2019 年 4 月中旬、阿部さんと浅草・浅草寺の雷門の前で待ち合わせをした。

阿部さんはこの浅草で人力車夫という顔も持つ。冒険のためのトレーニングも兼ねて人力車を引いているのだ。そしてそれによって日々の生活の糧も得ている。浅草での人力車歴は 10 年以上で、1 万人以上を乗せてきた。

「阿部屋」という予約専門の人力車業を浅草で自営している

現れた阿部さんの胸元に飾られた銀色のペンダントに目が留まった。阿部さんは 4 歳の時に交通事故で父を亡くしている。当時父は 29 歳だった。その父の遺骨が入ったペンダントである。阿部さんは父が亡くなった年齢になった時に、父方の祖母にそれをもらったという。7 年間、ずっと身に着けておりはずすことはない。

「いつ死んでもおかしくないという意識は常に持っています。たとえ若くても年をとっても人はいつか死ぬので。だから今死んでも後悔しないような生き方をしたい。」と阿部さん

は語る。夭逝した父がその後の阿部さんの人生に色濃く影響を及ぼした。そしてもう一つは冒険家・大場満郎氏の生き方に背中を押されたのである。

浅草で取材に応じてくれた阿部さん

阿部さんは子どもの頃、読書が好きで冒険の物語をよく読んでいた。子どもの頃は体が弱く、いじめられっ子だったという。そんな阿部さんにとって、果敢に挑戦を続ける冒険家は憧れの存在だった。阿部さんは今も幼い頃からの冒険家への憧れの夢をずっと追いかけているのだ。

その後国立秋田大学に進学した阿部さんは、ある時、山形県出身の冒険家・大場満郎氏の記事をインターネットで見つけた。大場氏は北極と南極を世界で初めて単独歩行で横断し、「アースアカデミー　大場満郎冒険学校」を主宰している。2000 年には「1999 年　植村直己冒険賞」を受賞している日本を代表する冒険家の一人である。

阿部さんはその記事の中で、「自分が冒険をする理由は、人生を後悔しないように、笑って死ねる人生を送れるように生きたいからだ。だから冒険をしていきたい。」という言葉に衝撃を受けた。大場さんのように笑って死ねる人間になりたい。そこで、大場さんの冒険学校に、「あなたみたいな人になりたい、なんでもやるので置いて欲しい」という主旨の手紙を書いて送った。大学は 2 年間休学して、大場氏の冒険学校で生活を送り、冒険家としての基礎を学んだ。

その後復学し、大学4年生になる頃には、同級生は全員就職活動を始めた。阿部さんは機械科専攻だったので、周りではエンジニアや大学院進学を志望していた人が多かった。その時に改めて、「どうせ人生は1回しかないのだから、幼い頃からの夢である冒険家を目指そう」と思ったという。その時の決断が、今の阿部さんの冒険家のキャリアに繋がった。

「冒険家」という職業意識

キャリアという視点から、阿部さんに職業としての冒険家について聞いてみた。

「プロ意識みたいなものは育ってきています。つまり、応援される人間として正しい人間でなければいけない、ということです。」そしてこう続ける。「冒険を志すものはみんな様々なチャレンジをしたいんですよ。でもできないんです。何故ならお金がないから。実力とお金の両方が付いてこないと成功しないんです。」

報告会での阿部さんの立ち居振る舞いや、パワーポイントを使ったプレゼンテーションの話術や視覚的な表現の巧みさを見て、筆者は阿部さんを大変な努力家だという印象を持った。どうすれば人が応援してくれるのか、それを全力で表現していると感じたからだ。

阿部さんの周囲には応戦してくれる経営者が多い。そういう人たちから自然とビジネススキルを学び、加えてビジネスセミナーを受けていた時期もあったという。プレゼンテーションのやり方などを、ビジネスパーソンの精鋭と一緒に勉強した。

阿部さんは南極点単独徒歩到達にあたって、様々な資金調達を試みた。今回は、約1,500万円が必要だった。自身の人力車での収益はもちろん、支援企業から500万円の他、クラウドファンディング、個人の支援金、秋田と板橋の壮行会のチケットの売り上げでそれを達成した。報告書はすべてインターネット上で公開され、誰でもそれを読むことができる。その中でもっとも支出が大きかったのは飛行機のチャーター代だ。

次回の白瀬ルートでは億単位がかかると予想される。メスナールートでは他の冒険家のメンバーと飛行機代をシェアしたのでこの価格だったが、次は単独チャーターになる。この飛行機代を集めるところからからすでに冒険に入っていると言えよう。

阿部さんは「集められるという確証はありません。でも諦めない。諦めない限り実現できると信じています。」と語る。

チャレンジャーがたくさんいる国になればいい

2019 年 11 月、「白瀬ルート南極点単独徒歩到達」を目指す予定の阿部さん。それに先駆けて 2019 年 4 月 27 日から、阿部さんは生まれ育った東北地方を秋田駅から出発し、2 ヶ月かけて約 1,500km を人力車で回る。南極では約 110kg 以上のソリを引いて歩くが、人力車も同等の重量がありそれを引いて歩くのだ。白瀬ルートを目指すに当たっての体力強化である。

最後に今後の夢について尋ねてみた。

「僕は秋田県人の夢を実現したいと思っています。白瀬ルートの踏破は僕の夢というよりは、秋田県人の、そして日本人が今まで出来なかったことを実現することなんです。人の意志は受け継がれていきます。」そしてこう続ける。「僕はもともと、平凡な人間です。それでもたくさんの人たちから応援して頂きました。将来的には僕はその応援を、次世代に返していかなければならないと思っています。」

その将来的な応援は、秋田県に「冒険学校」を創ることで叶えたいと言う。冒険家を育てるのではなくて、自然と触れ合う場所を作ってチャレンジすることは楽しい、自分はそのままで居てもいいんだと思える場所を作りたい。そしてチャレンジャーがたくさんいる国の一助になればいいと語る。

阿部さんの言葉には、起業家精神に通じる様々な言葉が散りばめられていた。インタビューを終えて、阿部さんの著書に記されていたフレーズがふと筆者の頭をよぎった。

「それでも僕は諦めない。
やり方次第で示せることがある。
諦めずに戦いたい。」

文・照片 奥山 睦（Mutsumi Okuyama）

编辑修改 JST 客观日本编辑部

＜参考資料＞

『次の夢への一歩』(阿部雅龍 角川書店 2013)
人力チャレンジ応援部　https://www.jinriki-support.com/
阿部雅龍公式ホームページ　https://www.jinriki-support.com/abe/
阿部雅龍 Facebook ページ　https://www.facebook.com/masatatsu.abe
夢を追う男　阿部雅龍　-リキシャジャパントラバース-Facebook ページ
https://www.facebook.com/garyu.keepsmiling/?tn-str=k*F
Explorersweb：Masatatsu Abe on a Hard Trek to the South Pole
https://explorersweb.com/2019/04/17/masatatsu-abe-on-a-hard-trek-to-the-south-pole/?fbclid=IwAR2iSC6WLCEZf4ePZ4z2-ww51jDxwuunpXG6i64-EmnkbpiEHvQXCWJQDKM